法人だより たまふく

社会福祉法人 多摩福祉会
きもちつながる、想いひろげる。

法人創立 50 周年を迎えて
～子どもの権利と平和

多摩福祉会理事長　垣内　国光

当法人は今年で創立 50 周年を迎える。年初からウクライナ侵攻が始まって多くの子どもたちが犠牲になっている。創設者浦辺史（1905－2002）が存命であればどう考えるのか知りたいが今となっては叶わない。子どもの権利と平和のために実践し研究し活動してきた人物であり、この法人も、子どもの権利を守り平和な社会を作るために創設されたと言っても過言ではない。改めて、子どもの権利と平和について振り返る意味があるように思う。

教育勅語を奉戴し戦争賛美の軍国主義教育を行わなければ国賊とされた戦前、小学校の訓導であった浦辺は、子どもたちと心を響かせあい、その素直な気持ちを膨らませようと生活綴り方実践を進めた。そのことで治安維持法違反に問われた。浦辺が1945年10月に東京拘置所から解放されるまでに大日本帝国は何をしたか。侵略した朝鮮半島、中国東北部、アジア太平洋地域の犠牲者は二千万人以上に上り多くの子どもが含まれているとされる。子どもの権利を守ることと戦争とは相容れない。国家が要求する子ども像に合わせた実践ほど罪深いものはないことを浦辺は身をもって証明したと言えよう。

創設者　浦辺　史

当法人は、子どもに寄りそったしなやかな実践を進めてきたが、その源流にはこうした浦辺ミッションがあることを胸に刻みたい。この世に多摩福祉会が存在することの意味は何か。これから先の 50 年も考え続けていきたいものである。

こぐま保育園落成記念　1973 年 5 月

連 絡 先

〒155-0031
東京都世田谷区北沢
2-36-9-4F
社会福祉法人多摩福祉会
法人事務局
◆Tel.　03-6804-8345
◆Fax.　03-6804-8347
◆Mail:
tamafukushikai@gmail.com

今号の目次

1Ｐ　法人 50 周年を迎えて
子どもの権利と平和
2～3Ｐ
こぐまのふゆまつり
4～8Ｐ
多摩福祉会保育･学童支援
合同研究集会を開催しま
した

バックナンバーは
こちらから！

わたしたち社会福祉法人多摩福祉会は

創立 50 周年を迎えました

～法人創立 50 周年記念祝賀会～

日時：2022 年 11 月 19 日（土）11：30～13：30

会場：ハイアットリージェンシー東京

集まらない『ふゆまつり』

こぐま保育園　保育士

毎年恒例の『ふゆまつり』。園と父母の会、同窓会、組合、理事会の5者の共催で行う行事のひとつです。例年は在園家庭だけでなく、地域の方も招き、給食の味を味わっていただけるように模擬店を出したり、子どもと共に遊べるワークショップや、父母による絵本の読み聞かせコーナーを設けたりしています。2020年度はコロナ禍で「集まる」ということが難しい状況にあり、中止となりました。

そして2021年度、「やらない」を選択するのでなく「できる形を追求しよう」という職員・父母の思いから、集まらなくてもできるおまつりの形を父母と共に模索することが始まりました。

≪父母の実行委員作成ポスター≫

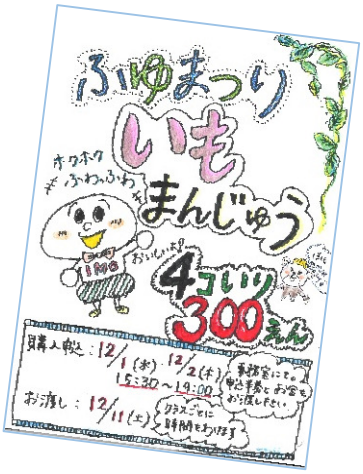
「集まらないおまつり」の追求

『集まらないおまつり』ってどんな形だろう…。今までのふゆまつりの土台に立ちながら、どんな事ができるのかの検討が始まりました。まず職員・父母それぞれでアンケートを取り考えあいました。例年行っていた『絵本紹介』は紙面での交流ができるのではないか？また親子で楽しめるワークショップも形を変え、工作キットを家庭に配ることで、親子で一緒に楽しめる時間が持てるのではないか？等の意見が出ました。

そんな中、父母から「集まることはできないけれど、いもまんじゅうをテイクアウトで食べたい」という声が届きました。いもまんじゅうはふゆまつりの定番かつ大人気の模擬店メニューでした。「こぐま保育園の自慢の味、ぜひ食べてほしい」と職員もその思いに共感し、いもまんじゅうの販売ができる形の検討も行いました。

そして大きな課題となったのは、地域への子育て情報・保育情報の発信でした。ふゆまつりは在園家庭だけでなく、地域に住んでいる方、地域で一緒に子育てをしている家庭に向けた行事でもあります。法人が目指している「地域に開けた保育園」であるために、どんなことができるかを模索していく中で、インターネットを活用した配信ができないかという提案が上がりました。しかし、パソコンが得意な職員は少なく、インターネットを駆使した情報発信でどんなことができるのか、詳細は決められませんでした。父母の実行委員会に提案する中で、そういったことを得意とする父母に相談させてもらおうとなりました。

絵本紹介、工作キットの配布、いもまんじゅうの販売、そしてインターネットでの情報配信。これら4つの企画を父母との実行委員会に提案し、父母と共に『集まらないふゆまつり』を作っていくための大枠が決まりました。



≪父母の実行委員作成ポスター≫

父母との話し合い、作り合い

4つの検討した案を父母との実行委員会に提案しました。感染予防のためオンライン会議となり、意見交換というよりも、一方的な説明と提案という形になってしまいましたが、父母の方には快くご理解いただき、クラスごとの係分担決めを行いました。にじのおうち（ゼロ歳児クラス）にとっては入園後初めての行事ということもあり、こぐま保育園のことを知ってもらうという観点から「いもまんじゅうの販売」を担当してもらいました。異年齢クラスは、絵本紹介をそら・もりのおうち、工作キットをやま・かぜのおうち、そして情報配信をうみのおうちが担当することとなりました。

担当が決まり、クラスごとの話合いが始まると、職員だけでなく、父母からも「これはどうですか？」、「○日までに試作してみましょう」、「実行委員だけでなく、クラスの全家庭にアンケートを取りましょう！」などの意見を出してくださり、共に考え、共に話し合いを進めてくださいました。そういった姿を見ると改めて、こぐま保育園が父母の力

に支えられていること、そしてその心強さが感じられました。中でも、職員が最も悩んでいた配信の担当となったうみのおうちは、「動画編集できますよ」と言ってくださったお父さんの力を借り、動画配信を行うことにしました。準備期間があまり長くとれないこともあり、動画は1本、できても2本かなと思っていましたが、「あ、大丈夫ですよ。編集はすぐにできますんで～」という心強い言葉をいただき、「わらべうた紹介」、「給食のレシピ紹介」、「おすすめの公園紹介」の3本の動画を作成することになりました。もちろん動画配信のクラスだけでなく、それぞれのクラスが、職員を交えた実行委員みんなで密に連絡を取り合いながら、ふゆまつりの成功を目指し、共に作りあうコロナ前のおまつりの姿が見られました。

ふゆまつりの開始

ふゆまつりの始まりは『いもまんじゅう』の販売からでした。父母の声を受け実現したいもまんじゅうの販売。いもまんじゅうに、特別なこぐまの焼き印を付けると、それを見た父母から「かわいいですね♡」という声を多くいただき、こちらもにっこり。「できてよかった！」本当にその一言でした。

週明けの月曜日からは父母と共に考えあった、『集まらないふゆまつり』の本格始動。園内では工作キットの配布と、絵本紹介の掲示、ホームページ上では、地域の家庭も楽しめるように…と、動画の公開が始まりました。ふゆまつりが始まると、父母の連絡帳には多くの感想が寄せられました。

「いもまんじゅう、とってもおいしかったです」「こぐまの味を親子で楽しむことができました」という感想や、卒園児のきょうだいがいる家庭からは「これだよ、これ！これがこぐまの味なんだよな～」といって食べていましたというエピソードも届きました。他にも、給食のレシピ動画を観た園児が、「今度はスイートポテトパイのレシピを流してよ」と給食室に言いに来てくれたり、絵本紹介掲示前では多くの家庭が足を止め、親子楽しそうに会話を交わしている場面を見たりすることもできました。

コロナ禍で今までのようなおまつりを開催することはできませんでしたが、父母の力を借りながら、共に作りあう新たなおまつりが開催できたことが何よりうれしく思いました。

この記事を書くにあたって、「どうしてそういった実践ができたのか？」という質問をいただきました。父母が一緒に園行事を考え、運営してくださる、園からするととてもありがたい力です。どうして…を考えるとまず1つ目に異年齢保育の賜物ではないかと考えます。1歳～5歳の異年齢保育。小さい子は大きい子へ憧れを抱き、その姿を見て成長していきます。遊びも大人が教えるのでなく、生活の中で自然と伝承していきます。父母の中にも異年齢の要素が受け継がれているのではないかと感じます。こぐま保育園のことを何も知らないまま子どもと共に入園した父母が、先輩ママ・パパと共に行事を行うことで、こぐまの行事の参加の仕方を感じ、力をたくさん出していただき、そして次の新しい父母にその姿を伝えていってくださる、そういった自然のつながりが生まれているように感じます。

また、父母同士のつながりだけでなく、職員と父母も日々子どもを真ん中にし、子どもにとっての最善を共に考え、意見を交わしあえているからこその積み重ねではないかとも感じています。

私たち保育士だけでなく、父母の皆さんがいてこそのこぐま保育園。それをこのふゆまつりを通して改めて感じることができました。

≪絵本紹介展示≫

法人研修委員会より

2021年度　第7回
多摩福祉会保育・学童支援合同研究集会
を　開催しました！

２０２１年11月６日（土）に、第７回となる「多摩福祉会保育・学童支援合同研究集会」を開催しました。

新しい取り組みの中で うまれた形

昨年から続くコロナ禍で今年度の検討が始まりました。昨年度はオンライン講義を一斉に視聴し、各施設で討議する形でした。そこから新たに一歩踏み出し、昨年度意見の多かった、法人の仲間同士での意見交流が相互にできるよう、開催方法をYouTubeでの記念講演と、オンラインでの交流としました。

垣内理事長による記念講演動画では、多摩福祉会の歴史と理念を丁寧に分かりやすく伝えて下さいました。時と場所を選ばず、いつでも視聴できるようにしたことで時間の有効活用が可能となりました。

当日のオンライン交流では延べ３００人を超える方々の参加がありました。多くの参加者と共に、「今こそ子ども主体の保育・育成を～各施設の子どもの様子を語りあおう～」との本研究集会のサブタイトルにあったように、互いに生き生きと語りあう時間をもつことができました。それぞれの提案や様々な意見を聴き、自身の保育・育成を振り返りながら、今後に続く新たな力を得ることができたのではないでしょうか。

これら二つの新しい方法は、これまでの集合型研修会のあり方では実現が難しかったことですが、「できるだけ全員が参加する」ということを可能にしました。当日の保育・育成を各施設で行いながら交代で参加することで、これまであった「参加する人」と、「保育・育成に残る人」という隔たりが解消されました。

また、いつでも視聴できる記念講演と、大きく６つ用意した分科会に参加することで、互いに共通認識を得ることもできました。オンラインでの開催には課題ももちろん多く残っています。しかし、このコロナ禍にあっても可能な方法で立ち止まらずに考え、学び続ける場を確立できたことは、この法人に働くみなさんの一助になったのではないかと自負しております。

垣内理事長記念講演
（YouTube 配信）

そして２０２１年度より、法人全体の研修体系づくりの検討を開始しています。これからの法人の研修体系を構築する意味でも、新たな取り組みを始める一年となりました。

その取り組みの一つとして、これまで別々の日程で行われていた「中堅層職員研修」と「新入職員研修」を、分科会として当日同時に行いました。こうして本研究集会の中に組み込むことで多忙な日程を一つにまとめることができ、それぞれに参加する職員、参加を支える職員、双方の負担を軽減することができました。また、身近に互いが学ぶ内容や様子が垣間見えることで、職員同士の相互理解にもつながったと考えます。

もう一つ、この方法をとったことで各研修担当者が他の研修会の意図や流れを知ることができました。今後の多摩福祉会の研修体系の検討、構築を進めていくうえでの貴重な体験となりました。しかし、役割を合併したことで多くの問題が生まれ、準備会議以外の時間にも多くのやりとりを行いながら当日を迎えることとなり、例年同様に

慌ただしく準備期間を過ごしました。今年度はオンライン上でスムーズに複数の分科会の進行をするという新しい力が求められたことで、より一層、不安感に苛まれた年でもありました。しかし当日も含め、担当の研修委員が実際に会うことなくこの役割を遂行できたのは、参加者みなさんの協力のもと、ここまでの経験を最大限に発揮し活用し進む力と、綿密な連携があったからだと実感しています。

新入職員・中堅層職員研修

【新入職員研修】

例年、新入職員研修は春先に行いますが、今年度は第一回目からの続編として、第二回目を法人合研の中で開催することができました。当日は20名以上の参加がありました。

こぐま保育園から「コロナ禍でのわらべうたについて」、砧保育園から「子どもの対応について」、永山小学童クラブから「コロナ禍の学童クラブについて」の3つの提案に沿って交流を行いました。

2～3年目の先輩方からは、自分たちも悩み、職員間で相談しながら関わってきたこと、子どもたちと共に育ちあう実践が話されました。参加した職員からも「自分は今こういう事に困っている」とそれぞれ話があり、交流を深めていくことができました。感想には「学童クラブでの様子が分かってよかった」「困った時には周りの先輩方に相談して力を借りていきたい」「自分だけじゃないんだとわかり気持ちが楽になった」と、今後の活力にしたいという意見がたくさんありました。先輩や同期と共に分かち合いながら保育・育成に関わっていくことの大切さを確認しました。

【中堅層職員研修】

経験年数5年以上の職員を対象に各施設からたくさんの方にご参加いただきました。「つながりあう中で育まれる子どもたちの育ち」というテーマで、コロナ禍においても変わらず子どもたちを中心に据えた保育・育成の実践をしている多摩福祉会だからこそ話し合える内容でした。

「日課づくりと職員間でのコミュニケーションの工夫」、「2年ぶりに行うプール活動」、「保育園と学童クラブのちがい」、「職域保育者として」の4つの提案を全体会で発表しました。その後、4つのグループに分かれて分散会を行いました。グループごとに提案されたことについて意見交換をし、深め合いました。

私は「保育園と学童クラブのちがい」の分散会に参加する中で、保育園の先生たちが「就学前だから何かをする」のではなく、「保育園だからこそできる生活や活動を充実させていく」という話が印象的でした。そのことが学童クラブに入ってからも生き生きと自分を表現する子どもたちの姿につながっているのだと感じました。

【分科会A】

「環境から学ぶ子どもたち」のテーマで上北沢こぐま保育園と永山小学童クラブの実践報告を聴いた後、二つの分散会に分かれて情報交換をしました。

上北沢こぐま保育園からは、「異年齢保育の中で代々引き継がれてきたカブトムシ飼育の様子」、「その活動の中での子どもたちの育ちや保育士の関わり」について実践報告がありました。

永山小学童クラブからは、「2、3年生の子どもたちが中心になり、子どもたちと支援員が共に考えながら取り組みを進めたプランターでの野菜作りの様子」について実践報告がありました。

どちらの実践報告についても、子どもたちの興味や「やってみたい」という気持ちやアイデアを尊重しながら職員が子どもと共に考え、工夫して実現していました。その過程で様々な学びがあったこと、職員の積極的な関わりや環境設定によって子どもたちの様子が変わってきたことを聴くことができました。

分散会では、各施設で実践してい

ること、やってみようと考えている生き物の飼育や植物の栽培についての情報交換をしました。その中で、生き物に触れることを通じて「命の大切さを子どもたち自身が学び、職員がどのように子どもたちに伝えてきたのか」についての意見交換をしました。保育園と学童クラブの子どものそれぞれの発達に合わせた保育・育成の理解を深め合うことができました。また、分科会Aのテーマ「環境」について保育・育成における環境の整え方や遊びの見直し、異年齢保育の中での遊具提供の工夫などについて学びました。

【分科会B】

90名以上の方が参加しました。向山保育園から「2歳児の食育～夏のとんぼ農園を通して」、貝取学童クラブから「分かち合う時間」、貝取小学童クラブから「学童クラブのおみせやさん」の3つの実践報告をしていただき、4つのグループに分かれて意見交換をしました。

私が参加したグループでは、各施設で取り組んでいる食育の内容を出し合いました。

一番印象に残ったのは、上北沢こぐま保育園の実践です。日常的なお手伝い、味見、三食群の張り出しなどの取り組みをする中で、子どもたちが食育を通して気になったことを手紙に書いて給食室前のポストに入れ、給食職員とのやり取りをした実践です。給食職員は、子どもたちからの手紙を通して子どもの率直な気持ちややりたいことなどを知ることができました。子どもからの手紙に対して、給食室からも返事を書いて子どもたちとやりとりを進めていったとのことでした。なかなか日常的に給食職員が子どもと関わりあう機会がもてない状況がある中で、「子どもと給食室」がつながりあう素敵な実践だと感じました。

また、年齢ごとの食育の実践では、向山保育園からの報告を受けて、「2歳児でもできる食育とは?」を皆さんと考える良いきっかけとなりました。食育の内容、やり方について各施設の実践報告から色々なアイデアがだされました。どの年齢でも食育ができること、五感を使う体験の大切さを共有しました。そして、どの年齢においても「食育」(食に関わる体験)が園生活の様々な体験の中に位置づけられていくことの大切さを学びました。

【分科会C】

「ゼロ歳児保育」のテーマで、こぐま保育園から「3か月未満児の保育」、上北沢こぐま保育園から「五感を大切にした保育を目指して」の実践報告を聴いた後、2つのグループに分かれて意見交換をしました。

「3か月未満児の保育」では、「食事」「遊び」「発達」「睡眠」について、数週間ごとの子どもの様子や成長過程、日々保育をしている中で保育者が感じたことや気付きが細かく報告されました。砧保育園、上北沢こぐま保育園も、生後57日から入園できますので、こぐま保育園での実際の保育の様子を聴けたことは大きな学びとなりました。

「五感を大切にした保育を目指して」では、絵の具を使ったペイント活動や食材を使った活動についての実践報告がありました。実際に活動をしている様子の写真やおたよりを見せてもらい、回数を重ねるごとに子どもたちの姿が変わっていく様子を共有することができました。各施設でどのような感触遊びを行っているのか、その時の子どもの様子や配慮点などについても意見交換することができました。

生活が豊かになったことで、子どもたちは五感を使うこと、全身を使う経験が減ってきています。日々の生活の中で五感を使った体験がで

きるよう工夫していくことの大切さを改めて確認することができました。

【分科会D】

「乳幼児期から学童へ、つながる支援」のテーマで、話し合いました。こぐま保育園から「つなぐ　つながる　つながりあう～『子ども』も『おとな』も育つ学びの物語～」を、永山学童クラブから「保育園と学童クラブのつながり」をそれぞれ提案しました。

どちらの提案もL子ちゃんとY子ちゃんを中心に描かれたもので、保育園での様子と学童クラブでの様子につながりを感じることができました。研修参加者から、「このような実践は珍しいのでは」という声があがりました。様子を語り合っているところはあるかもしれませんが、実践としてあがってくることは全国的にも珍しく、多摩福祉会ならではのものではないでしょうか。

こぐま保育園の提案に、Y子ちゃんがみんなに「たすけて」というシーンがありました。仲間との「つながり」を求めていく節目になっていたのではないかと思います。その周りにいる仲間がY子ちゃんを「放っておかない」関係性であることがとてもいいなと感じます。こうした「つながり」を経た子どもたちが、学童クラブに行ってからも同じように子ども同士の「つながり」の関係で生活をともにしていることが、永山学童クラブの提案からわかりました。「つながり」ができるということは子どもたちにとって「学び」となっています。

「以前からこぐまの子は小学校3年生くらいから力を発揮すると言われる」「こぐまの子は“たて”“よこ”の『つながり』や『かかわり』が自然」という話がありました。国連子どもの権利委員会は、乳幼児期を「適切な便宜上の定義として、出生から8歳までの期間とする」と提起しています。わたしたちが保育・育成している子どもたちは、信頼するおとなや仲間とのかかわりを基礎に、身辺自立や言葉と行動の調整が図られるようになり、能動的、具体的、体験的な学びを通して育ちます。保育園時代は「話しことば」を開花させる時代であり、その豊かな体験が9・10歳頃の抽象的認識や「書きことば」の育ちを支えることになります。わたしたち大人にとっても、よい「学び」になった分科会でした。

参加者のみなさんからの感想

今回は参加者アンケートも、新しくGoogleアンケート機能を利用しての回答をお願いしました。一部不具合もありご不便をおかけいたしました。

【記念講演について】

・改めて、多摩福祉会のめざす、お互いに尊重し協力しあう自主性や、常に子どもとともに学び交流して実践を見直し新たな試みを進める点が、常に変化する子どもを取り巻く環境や社会情勢においても先進的な保育や子育て支援に繋がると思った。

・浦辺先生の大切にしてきた思いを学び、日々の保育の中で改めて、子どもの思いを汲み取り、受け止め代弁して伝えることを大切にしていきたい。

【新入職員研修について】

・同じ法人であっても、クラスの構成などの違いによりそれぞれ特色があり、意見交換ができたことで大変勉強になった。

・実践を通して、「自分もこれで悩んでいるな」と親近感が沸いた。新人同士だからこそ分かり合える悩みや相談ができた。

・新入職員の方々が、子どもや先輩達を頼りながら進んできたと話していて、悩みは多いけれど保育を楽しみながら創っていることを感じた。

【中堅層職員研修について】

・中堅としての立ち位置を考えさせられ、学ぶ事、伝える事など改めて自分自身に問い直すきっかけとなった。

・参加者の幅が広かったからか、提案から話が逸れる事が多いと思っ

た。研修体系を検討する時に、より経験年数・役職層が区分されると良いと感じた。

・日課・職員間のコミュニケーション、担当制という内容は各施設の保育・育成支援で関わることなので、次年度も継続的に話し合えるといいと思った。また、法人間の研修で学んだことと併せて、施設間交流実習等をしていきながら、次の研修で継続的なやりとりができるとより良いと思う。会議や話し合いの進め方、文章の書き方や発表の仕方も共通認識として学ぶと良いとも感じた。

【各分科会について】

・分科会が時間で区切られていて前半と後半で違う分科会に参加できたことで、いろんなテーマの話が聴けたのが良かった。

・各分科会が2時間の設定だったが、発表で時間がかかることもあり、その後のグループ討論の時間が短いように感じた。

・初めて法人合研に参加してみて楽しかった。またこのような実践報告をききたい。大変勉強になった。

・今後も拠点を越えた、または、同じ施設内でも職域やおへやを越えての実践報告があると面白いかと思う。それが、職員の自然な交流に繋がり異動も抵抗なくできることに繋がるきっかけになったらとも考えた。

・実践もそうだが各園の工夫や悩みを知ったことで、まだまだ工夫できることはたくさんあると日々のヒントをもらうことができた。

・パソコンを駆使してこんな研修が企画運営できて、本当にすごいと思った。

他にも忌憚のないご意見、ご感想を多く頂き、研修委員としても学ぶことが改めて多くありました。みなさんからの貴重なご回答を今後の研修運営に活かしてまいります。ありがとうございました。

法人研修の未来について

冒頭でも少し触れましたが、現在法人では、これまで培ってきた各研修会の実績をもとに、新たな法人全体の研修体系の検討をしています。「職員が子どもの姿に学び、主体的、継続的に学びを重ねていくためには」「主体的な学びを法人としてどうサポートするか」「地域、保育・学童支援、職域の違いを越えて互いに支えあう関係づくりをするには」など、職員の更なる意欲向上や次世代育成を目指し、論議しています。

既に、具体的に動き始めていることがあります。本研究集会で見聞きしたことを実際に体験し学びを深めるようにと、「施設間交流研修」を開始しています。是非、活発な交流が行われ、次の実践に結び付けていってくれることを期待しております。

また、今回の研究集会を運営する中で研修委員自身が再認識した「研修会を作ること自体も研修だった」という点から、中堅層職員の方々に研修の運営を体験してもらうのはどうだろうかなど、今後、職員のみなさんの成長の糧となるような研修内容もできたらいいなぁ、と夢を膨らませております。

（法人研修委員会一同）

たまふく 15 号の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

次号より、広報委員会は新年度メンバーでお送りいたします。今後ともご愛読いただきますよう宜しくお願いいたします。

●広報委員会●

中本　琢也　江藤　龍之介

岩﨑　玲以　岡田　織

●広報委員会より●

広報委員　中本のところに

第２子となる男の子が産まれました!

初々しい兄弟のツーショットです。

「ぼくがおにいちゃんだよ❤」

たいせいくん　（3 歳）

しゅんぺいくん（4 月 4 日生まれ）